

東京キングダムセミナー①2022.10/1

では、東京キングダムセミナー第1回目を始めます。

火曜日のライン集会では、もうこれで、本を3回目めぐっています。で、この3回目は、かなりゆっくりペースで、詳しくじっくりやっています。3回目は、今もって、82、83ページあたりをやっているところです。多少耳にした方も、今日まったく初めてだという方もこの東京セミナー大いに歓迎します。

今日は、皆さんの大事な一日を、ここまで足を運んで、準備して、汗かいて、時間とって来られたのですから、腹を決めて、集中してやろうじゃありませんか。ライン集会だったら、家でくつろぎながら聴けるんだろうけれど、今日は、そういうわけにはいきませんからね。(笑)

先週の火曜日にライン集会でやった箇所を今日は、全部は読みませんが、《神の国って何ですか?》というテーマで、今、やっているところです。

その中で、イエス様が神の国の例え話を、マタイの13章の1章を使って話しておられます。「神の国はこのようなものです」と。「ある人が畑に麦を蒔いたところ、毒麦が生えてきた・・・。」という例え話がありますよね。そういう例え話をこの火曜日に詳しく話しました。

聖書を開ける方は開いて頂けるとよいのですが・・・、その1節ちょっと読んでみますね。マタイの13章で、例え話がずーっと続いている途中に、34節「イエスがこれらのことをたとえて群衆に話された。たとえを使わずには何もお話にならなかった。」35節「それは、預言者を通して言われたことが成就するためであった。『私は、たとえ話をもって口を開き、世の初めから隠されていることどもを物語ろう。』聖書を読んでいて、こういうところに、普通、目が留まりませんよね。そういうところが、いっぱいあります。聖書を読んでいて、スーッと過ぎてしまいがちですよね。イエス様は、旧約聖書をよくご存じだったから、詩編のところにこういう箇所があって、それを引用していらっしゃるんです。「神の国は、こうこうこうで、こういうものです」と言われているその例え話の中で、イエス様が「世の初めから隠されていたことなんだよ」「これ皆さん、新しく聞くことじゃあないんだよ」と言われている。「じゃあ、何で隠すのよ」「初めから陳列しときなさいよ。」と言いたいけれど、隠されているんです。それは、真剣に尋ねる心がない人には、分からないように、わざと隠してあるんです。だから、「世の初めからって、どういうことよ」という、——そのところです。

そこで、「世の初め」といったら、何ですか? 「地の基が据えられる時、創世記の天地創造の時から」と、言うことでしょ。「えー、どういうことなんですか?」と。聖書をお持ちの方は、創世記の最初を開いておいてください。

これを言い出すと、キングダムセミナーを長く学んでいる方は、もう、ピーンときて、「もうそれ、いっぱい聞いたし、いっぱいしゃべったわ。」ということでしょうけどね。(笑) それでも言います。どうぞ、同じ真理は20回聞きましょう。皆さん、本気で言っていますよ。あっちこっちの教会へ行き、あっちのユーチューブを聞いて、・・・パッと聞いて、頭に「なるほどー」って、みんな賢いから、パバパッとわかるんです。分かるんだけど、それだけなんです。その「分かる」と、本当に血となり肉となって、自分の腹の底でグッと、消化しているのとは違うんです。クリスチャン生活長い人はわかるでしょ。今、「うんうん」うなずいている人は、大概そうです。(笑) ですから、同じことを言うようですけど、今日はそれを深めていきます。

東京キングダムセミナー①2022.10/1

まず前半は、じっくり、創世記の一番初めのところ、これを聞いてください。

私たち聖書で、「初めに・・・ん？何々？」創世記1:1「初めに神が天と地を創造した。地は形なく何もなかった。やみが大水の上にあり、神の霊が水の上を動いていた。」なんか短い文章で、淡々と書いてあるけど、分かったようで分からないですよ。「1日目こうね、2日目こうね、3日目こうなのよね。4日目こうね。・・・こういう順番でね」と、読むじゃないですか。天地が造られた順番が書いてあって、まるで理科の教科書ですよ。悪く言えば。そうでしょ。教会学校の先生をされた方は、これをどう子供たちに説明されましたか？

私も若い時、教会学校の教師をしていて、この1章の影絵を徹夜して作って、日曜日の朝、教会の子どもたちに向けて演じて、・・・こういうふうの下から動かしてね。「1日目だよー、2日目だよー」とやったんですよ。それがもう、今も胸に心に焼き付いている。今でもそれは、思い出せる。それで子供たちが、「あー、おさるさんだー」って言って、盛り上がるんですけど、まあ、それはそれで、読まないよりは良いでしょう。

ところが、これ、モーセ五書でしょ。モーセが初めの五つを書いたって言われていますが、モーセが一生懸命、「羊皮紙」を取って、それにペンで、初めに書いて、こーんな巻物にしてそれを民衆の前に持って行って、「ほーら、書けたぞー」、「読めよー」と言って、「どれどれ」ってやったんでしょうか。・・・そんな書く時間がどれだけありますか？

初めはね、皆さん、聖書というのがあって、「何々？何が書いてあるの？」って、こんなじゃなかったんです。あの頃は、神が言われたことを口移して伝えて、「神はこう言われた。」と。聞いている人は、それをジーっと聞いている。「神は、そう言われた。」と、そしたら、後ろにいる人に「神は、そう言われたんだ」と、自分の天幕に帰って「神は、こう言われたんだよ」と家族に・・・、口移して伝えて、繰り返して、繰り返していく習慣。一字一句間違えないで、繰り返して、繰り返していく習慣だったんです。聖書って。だから、紙に書いたのを読んで、「印刷できたから、ハイ、配って」というのとは、全然違うんです。今だからそれが出来るんであって、昔はそんなじゃないわけでしょ。だから口伝で語っていたんです。

今は、礼拝式で司会者が「聖書朗読します」と言って、「初めに神は天と地を創造した。地は形なく、なにもなかった。」と読むじゃないですか、でも、そんなふうにする訳がなかった。そして、みんな学校に行ったわけじゃあないから、だから、しっかり耳で聞いて、心に落ちるように彼は語られたし、聞かされたし、聞いたわけよ。

これって、本当に、ゆっくりゆっくり、一語一語が大切な。今、我々日本人は「初めに神が大地を」で、それで分かってしまうけれど、その「初めに」っていうことばの一言が、「？」「天と地を・・・？」なんですよ。そんな世界。ですから、ゆっくりゆっくり、一言一言を、単語を味わいながら読むことが、聖書なんです。そうなんです。これ重要。頭をチェンジしないと、聖書を読む時、ミスっちゃうんです。

聖書は、何語で書かれましたか？ヘブライ語というのを聞いたことがありますか？

今、学んでいる方もいらっしゃるのですよね。ヘブライ語って、見たことがあります？ないですよ。日本じゃあ、あまり見ませんものね。どんな字だよって・・・。今日はライン集会じゃないからね、ヘブライ語を一つ、お見せしようと思って、(ミルトス社から出ている対訳聖書のコピー

東京キングダムセミナー①2022.10/1

を見せられる。)私、今日持ってきたんです。こんなんですよ。こんなこんな・・・、分かる？これ、創世記の一番初めのところです。「何じゃあ、こりゃ」って、文字でしょ。(笑) ご存じの方は、ご存じですよ。なに？このミミズが這ったようなのは・・・、ところがね、ヘブライ人から見たら、日本語の方が、ミミズが這ったようなんですって。「なーに？あの“み”っていう字、こっちの方が、角ばっていてカッコいいじゃん」って、誇りを持っているんです。こんなの読む気する？でもね、これでちゃんと、「天と地を創造した・・・」となっているんです。で、これを、いいですか？こんなの(聖書)なかったんですからね。大体語る人は、これをゆっくり語り聞かせて、聞いた人は、それを覚えて、で、また家に帰って語る、近所で語る、ってことだったんですよ。

こっち(左)から読むんじゃないですよ。こっち(右)から読むんですよ。

「ベレシート バラー エロヒーム」って、こんな感じ。それも覚えやすいようにいろんな工夫がされているんです。今日は折角、ネットじゃない集会ですから、私、サービスします。さあ、1枚ずつ渡して下さい。(ミルトス社から出ているヘブライ語聖書対訳シリーズ、創世記の初めの箇所のコピーを配られる。)さあ、皆さん、東京キングダムセミナーは特別ですよ。神学校でも聞かないような・・・、いいですか？ベレシート、って横に訳文が付いていて、その単語の下にカタカナが付いていて、その読みが付いていて、その下に意味が付いていてある。これだったら、誰でも読めますよね。すごいねー。こんなのが今、あるんですよ。「ミルトス社から出ているヘブライ語聖書対訳シリーズ」っていうのがあるんです。これ、誰でも買えます。ネットで調べたら安く古本が手に入る時がある。はい、だからいいでしょ。牧師でなくても、神学校に行っても、聖書学校行かなくても誰でもこれ、読もうと思うと、読むことができます。

皆さん、いいですか。これね、このように一語一語書いてあるけど、この文字の上と下にテンテンとか、チョンチョンとか、いっぱい余計なものが書いてあるでしょ。テンテンがあったり、チョンがあったり、髭が生えていたりね。そういうのを母音記号と言って、それには意味があるんです。ちょっと、皆さん、1節だけカタカナで読んでみましょう。サン、ハイ！「ベレシート バラー エロヒーム エット ハシャマイム ヴェエット ハアレツ」

凄い！これ、もう、録音で聞いた人、ビックリするよね。「キングダムセミナー、凄い、ヘブライ語の授業していて」と。これね、「ベレシート バラー エロヒーム エット ハシャマイム ヴェエット ハアレツ」(先生の朗読)このようにメロディーが付いているんです。覚えやすいでしょ。

親の集会で、これ聴いていた子供が先に覚えちゃうんです。その子供が青年になったら、もう聖書は、律法とトーラーは、自分の中にあるってことなんです。すごいでしょ。大人ほど、覚えられないんですよ。でね、「こういうふうに覚えなさいよ。」という記号もあるんです。書いてあるんです。だから、どこでもそういうふうに歌える。(朗読)

2章「ヴェハアレツ ハイター トフー ヴェヴォフ ヴェほシェふ アる ベネー テホム ヴェルアは エロヒーム メラヘフェト アる ベネー ハマイム」ってね、抑揚が付くの。こういうふうに古く昔から、言葉で、口から口へ伝えていたころのユダヤの人たちは、こうやって、メロディーをつけて覚えていったんです。こんな紙がなかったから、・・・そういうふうに覚

東京キングダムセミナー①2022.10/1

えていったんです。で、そういうふうに覚えていって、紀元前5世紀頃にこの聖書というのがまとめられて、一冊のいよいよ巻物になるわけですよ。それまではなかったんです。断片的にはあったんだけど、紀元前5世紀頃に聖書というものがやっとまとめられたんです。で、その頃、みんな歌えたわけ、それからイエス様の時代になって、教会が出来てクリスチャンが散らばっていった、世界中に行ったクリスチャンの異邦人たちが、「聖書って何？」と言いだしたんです。そして、旧約時代のヘブライ語の聖書をみんな持ってきて、ユダヤ人のラビにヘブライ語を教えてもらって、キリスト教の指導者たちが、一生懸命学んで旧約聖書を読んだんです。

「読んでも、読んでも、分からない、分からない」と言いながら読んで、覚えていないもんだから、何章何節をその人達のために後から付けたんです。それがやっとまとめられたのは、紀元3世紀が経っているわけです。でもね、もうその頃には、メロディーをつけて歌う歌い方を、もうキリスト教会は、マネしませんでした。なぜなら「あ、そんなの昔の古い人達が覚えてやっていたことだから、関係ない、関係ない」「原本があるからそれでいいのよ。」ってことになったんです。そして、キリスト教会の指導者が教えなくなりました。

それでもユダヤの人達は、やっと旧約聖書の完全な姿にまとめたんです。紀元6世紀、7世紀、8世紀にかけてやっと。そんな時代です。そして、そのまとめて書き記したものの中に、この歌い方も書き入れたんです。と、言うことは、書かれている前から歌い継がれていたものを、紀元6,7,8世紀かけて、つまり200年、300年かけて、ラビの偉いさんたちが研究して、研究して、自分勝手にならないように、この原文の意味を解きながら、歌い方を書き入れたんです。それが今も残っているわけです。

では、なんのためにそれがあるのか説明しますね。皆さん、今2節を読みましたが、次、3節を読みますよ。「ヴァヨメル エロヒーム イェヒー オール ヴァイエヒ オール」その次4節「ヴァヤル エロヒーム ベン ハオール キー トヴ ヴァヤヴデる エロヒーム エット ハオール ウヴェン ハほシェふ」4節の初めにあるこの「ヴァヤル」のこの下にSのようなマークが書いてあるでしょ。それが「ヴァヤル」（そして見た）を歌う時の楽譜なの。これが出てきたら、「ヴァヤーアール」（朗誦）って、歌うの。淡々と「ヴァヨメル エロヒーム」と言っているんじゃないんです。

何が込められているのか。日本語でつらつらと読めば、「光よ あれ」と言われた。「すると、光があった。」「神は光を見て、“良し”とされた。」と、そのまんまだけど、原文のこの歌い方では、「神は、光を——見たー!!」って、言ったの。そこだけ強調して、驚いて、感動して言っているんですよ。このように、この調子で、神の語る動作と感動と息づかい、語り方、そういったものが込められているわけです。ここをこう解釈すべきだというのが、ここから、くるわけです。

ところが、だんだんと時代がそういうのを忘れて、ことばの意味とか、文法とかね、この言葉の変化形とかね、そういうことばかり、一語一語に気をつけることばかりになってしまったんです。だから、原文解釈が難しくなってしまったんです。元々はそんなことやっていません。「ヴァヤル」「神は見た——！光を！」って、言っているわけです。それを聞いただけで、神様の気持ちと心使いが分かるように。

だからね、皆さん、創世記の1章を読み始める時、気をつけることは、動詞（神様の動作の動詞）、思いを現わすことば（祝福する、見た、名付けた、造った、など）です。本当によく強調されています。理科の教科書を読むように、スラスラ〜と、「はい、創世記はこうですよ。」と読む

には、あまりにも勿体ないんです。心にズンズンと響かせられる必要がある。これね、聞き手に神様は、しゃべっているんですよ。モーセが聞かされた時、モーセもそのように感じたことでしょう。神様が語った心づかい、息づかいをピンピン響かせられる。神との愛の対面、神様の息づかい、心臓の鼓動まで聞こえるような生きづかいを感じ取れるところに、我々は、みんな、その位置に招かれているんです。あなたが、創世記1章を読み始めたその時に、——招かれているんです。「理科の教科書を読みなさいよ。今度試験に出るからね。」というような冷めたもんじゃあないんです。そういう向かい合った顔と顔で、相手の息がわかるような、そういう語り手と受け手の存在なんです。ですから、その思いで創世記1章2節を読むと、「地は茫漠として何もなかった。やみが大水の上にあり、神の霊が水の上を動いていた。」たったこれだけ、なんだけど、簡単に通り過ぎる訳にはいかないんです。天と地を創造したと言っているのに、どんでん返しじゃないですか。1節で天と地を創造したんでしょ。なのに、2節の「何もなかった」の「何も」は、別訳で「空しかった、空虚だった」というような意味の言葉なんです。「神様が造ったのに、なんで空しいのよー」っていう驚きから出発します。「ええー?!」「やみが大水の上にあり」って、水だけはあったんですね。で、やみがその上をただ漂っていたっていうこの光景、どうですか。神様が造られたんでしょ。「やみが水の上ののっていたんです。」「ええー?!」ですよ。次の「神の霊が水の上を動いていた」という訳以外に「舞い降りていた、おりかけていた」という訳もあるんです。申命記32:11に、この同じことばが使われています。「鷲が巢のひなを呼びさまし、そのひなの上を舞いかけり、翼を広げてこれを取り、羽に乗せていくように。」と、この表現から想像してみてください。親鳥がパタパターっと、ほら、下に、雛鳥がいるでしょ。雛鳥が口を開けて、待っている、そこに親鳥がやってきて、餌をあげながら、パタパターっと、「早く大きくなあーれえー」「早く飛び立ってー」と言っているかのようなホバーリング、ここは、そのような表現です。神の霊が水の上をパタパターっと、「何か、今から起こるぞ、起こるよー」と言っているような表現なんです。ここは。

私たち、聖書の読者として、この語りかけに出会った時に、「やみが大水の上にあるって、何？それ」と最初に、それに出会う。クリスチャンとして、「心の中にはやみはありません。」と思う人もいるかもしれませんが。しかしながら、この世に我々が生きている時、心の中にやみも混沌もあるでしょう。わけが分からないことでしょうか。腹の中でも時々……。でも、そこに神の霊がただ漂ってきて、私達の心を「パタパター」っと、仰ぎたててくれているとしたら、どうでしょう。『メラヘフェト』（飛び回っていた＝鷲が雛の上を飛び回る様子）って書いてある表現です。神は、そうして下さっているんです。けどね、そうして下さっているだけで、私達は、まだ、やみと水の中で、ジーっと待っているわけです。

創世記1:3「神は仰せられた。『光があれ。』すると光があった。」その時、神が、「光よ、あれ！」っと、静かな中で、神が御言葉を発したら、すると、「光ができた」この語りかけは、神の霊が、聖霊が、今の自分に何かを語りかけておられるんです。「でも、今の私達には、何かわからない。もやもやしている。何か、聖霊は自分に語りかけ、仰ぎたてているのに……。それが何か、わからない。」そこで、御霊の中に神は、メッセージを——「光があれ」「〇〇さん、進みなさい、それで良いんだ。恐れてはならない。」と、声がかかってくるんです。私達に。その時、「私達は、その道を歩むんだ。」という、非常にダイナミックなことを現わしているといえるんです。

東京キングダムセミナー①2022.10/1

この短い1、2、3、節の中に、神と我々のダイナミックさが書かれているんです。「自分が、かりたてられているもの。反対に、おざなりにしているのは、なんだろうか。」と、我々は問いたい。でも、それだけじゃ、進めない。ハッキリ神が、「光あれ」「これに進め」と、一人一人に言うてくれることを、私達はカッと、掴みたい。「光あれ」と言われれば、光があった。「ある」というこの動詞をカッと、掴むように。

創世記1:4「神は光を見て“良し”とされた。神は光とやみを区別された。」

神はその光をよしとされた。神様が“良し”と、認めて下さったその神の心は、大きい。我々が手芸作品なんかを作った時、「よし！これで良かった！」と心に思う感覚です。その神様の承認があれば、他の誰が何と言おうと、神様がその言葉を言われれば、やっていける。ですよね。

創世記1:5「神は光を昼と名づけ、やみを夜と名づけられた。夕があり、朝があった。第一日。」この光を昼と名づけ、と、またここで「名前をつける」という、動詞が出てくる。神様は一人、部屋にこもってコツコツとやったんじゃないんです。ひとつ、ひとつ、相手を思って、対面して、向き合って、すべて思いを込めて、神様は、名前を付けている。それにふさわしい名前を。

創世記1:6「神は仰せられた。「大空が水の真ただ中にあれ。水と水との間に区別があれ。」1:7「神は大空を造り、大空の下の水と、大空の上の水を区別された。そのようになった。」神は大空の下の水と大空の上の水を区別された、この水っていうのは不思議ですよ。どこから出て来たんでしょう。神様は水を造ったとは書いてない。水は、初めからあるんです。神様の天地創造のすごい相手役であり、材料である水。この水によって、私達は、バプテスマを受け、生ける水が川となって川から流れ出ていくわけです。初めから終わりまで、水、水、水なんです。覚えておきましょう。

創世記1:8「神は大空を天と名づけたられた。夕があり、朝があった。第二日。」

創世記1:9「神は仰せられた。「天の下の水が一所に現れよ。」そのようになった。」

創世記1:10「神はかわいた所を地と名づけ、水の集まった所を名づけられた。神はそれを見て“良し”とされた。」

この天と地を「名付けた」というところも、さっきの歌う読み方では、「バイクラー」(朗誦)と、強い抑揚が付いているんです。乾いたところが現れる。現れた陸地を、「地(エレッツ)」と名付けたということもです。「エレッツ」というのは、今、イスラエルに行くと「エレッツ」と言えば、「約束の地」を現わします。ただの土地じゃないんです。「エレッツ」と言ったら、「イスラエルの約束の地」だと、ピーンとくるんだそうです。ここで読み手は、「地(エレッツ)」と名付けたということ、自分が立つべきところだと、そういう認識が、まじまじと出てくるわけです。

創世記1:11「神は仰せられた。「地が植物、すなわち種を生じる草やその中に種がある実を結ぶ果樹を、種類にしたがって、地の上に芽ばえさせよ。」そのようになった。」

創世記1:12「地は植物、すなわち種を生じる草を、種類にしたがって生じさせた。神はそれを見て“良し”とされた。」創世記1:13「夕があり、朝があった。第三日。」この地上、エレッツにあるものの種類の多さ、決して、単純な話じゃあないです。今もって私達は、自然科学会で新し

い種類が発見されているという、このバラエティーの良さを覚えておきましょう。

創世記 1:14 「神は抑えられた。『光るものが、天の大空にあって、昼と夜とを区別せよ。しるしのため、季節のため、日のため、年のためにあれ。』創世記 1:15 『また天の大空で光る物となり、地上を照らせ。』そのようになった。」創世記 1:16 「神は二つの大きな光るものを造られた。大きい方の光る物には昼をつかさどらせ、小さいほうの光る物には夜をつかさどらせた。また星を造られた。創世記 1:17 「神はそれらを天の大空に置き、地上波らせ、創世記 1:18 または昼と夜をつかさどり、光とやみとを区別するようにされた。神はそれを見てよしとされた。」創世記 1:19 「夕があり、朝があった。第四日。」

この創世記の聞き手、読み手のあなたにね、あなただけしかいないと思ってください。あなたにこれを提示されたときに、この光るもの、時の季節の区別、っていうのには、何の意味がありますか？我々が生きて行く時に、いろんな時がある。順調な時がある。逆境の時がある。わけのわからない時がある。苦しみの果ての時がある。前向きの時がある。ね、全部時がある。時、時。でも、その時を 造られたのは誰？時を支配するのは誰ですか？その奥の奥には、時というものをつかさどる、支配される主が、おられるわけです。いろんな時がありますよ、私たちには。今年はあるだった、こうだった、でも、その季節のいろんなものも主が与えて、私たちと共に聞かれ、進ませようとされるわけです。神はね、それを見て、「良し」とされたんです。

創世記 1:20 「神は仰せられた。『水には生き物が群がれ。鳥が地の上、天の大空を飛べ。』

創世記 1:21 「神は、海の巨獣と種類に従って、水に群がりうごめくすべての生き物と、種類に従って、翼のあるすべての鳥を創造された。神はそれを見て良しとされた。」創世記 1:22 「神はそれらを祝福して仰せられた。『生めよ。増えよ。海の水に満ちよ。また鳥は地にふえよ。』創世記 1:23 「夕があり、朝があった。第五日。」

「種類に従って」、「種類に従って」と何回も出てきます。そして神は、それらを祝福したんです。22 節の「そして祝福した（ヘブライ語のヴァイエヴァレふ）」は、神が、ただ「造って、祝福した」っていう、そんなじゃないんです。「ヴァイエヴァーレふ」（朗誦）「祝福したー！」とこんな感じで強く抑揚が付いているんですよ。「そんなにまで・・・、」って神様に言いたいくらい、祝福して下さっているんですよ。

創世記 1:24 「神は仰せられた。『地が、種類にしたがって、生き物を生ぜよ。家畜や、はうもの、野の獣を、種類にしたがって。』そのようになった。」創世記 1:25 「神は、種類にしたがって野の獣を、種類にしたがって畜を、種類にしたがって地のすべての はうものを造られた。神はそれを見て良しとされた。」そして、それが五日目でしょ。次いで神は、ここでもまた地の動物が「種類にしたがって」、「種類にしたがって」が出てきます。そして、それを「良し」とされたんです。

創世記 1:26 「神は仰せられた。『さあ、人を造ろう。われわれのかたちとして。われわれに似せて。彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配するように。』創世記 1:27 「神は人をご自身の形として創造された。神の形として彼を創造し男と女とに彼らを創造された」創世記 1:28 「神は彼らを祝福された。神は彼らに仰せられた。『生めよ。ふ

えよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのものを支配せよ。』創世記 1:29「神は仰せられた。『みよ。わたしは、全地の上にあつて、種を持つすべての草と、種をもって実を結ぶすべての木をあなたがたに与える。それがあなたがたの食物となる。創世記 1:30 また、地のすべての獣、空のすべての鳥、地をはう すべてのもので、いのちの息のあるもののために、食物として、すべての緑の草を与える。』そのようになった。」創世記 1:31「神は御造りになったすべてのものを見られた。見よ。「それは非常に良かった。」夕があり、朝があつた。第六日。」ここも、サアと読み過ぎしてはなりません。「人を造った」というところです。今までは、生きるものに、動物に、「生まれいでよ。」と言われたただけなんです。ところが人間にだけは、『われわれに似せて、われわれのかたちに人を造ろう。』と仰せられた。それだけじゃなく、『海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配するように。』と仰せられた。この 26, 27, 28 節は、一章の中で、ものすごい大きなことなんです。

人間は何のために造られたのか、人は「地のすべてのはうもの、地をはうすべてのものを、支配するため、治めるため」で、27 節、「神は人をご自身の形に創造された。」と、また書いてある。皆さんね、聖書の他の箇所でも、同じことが何度も繰り返されて言われるところは、要注意です。線引いとかなないとけないくらいです。また、「神の形として」と書いてある。男と女に選別して、神はまた、「彼らを祝福し」、「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのものを支配せよ。」と仰せられた。これが、人間に見る《神の期待》なんです。神様は、われわれの周りのすべてのものを治め、耕し、それを守り収め保持し、神の計画通りに築き上げていくことが、人に与えられた使命だったんです。

一般的に、アダムが造られて、女は後に造られたって、私達は聞かされてますが、ここには、どう書いてあります？人をご自身の形に創造されたんです。神の形に彼を創造し、男と女に分けて創造したと書いてある。つまり、一人のアダムを造ったんでしょ。その中に男も女もいたんですよ。一体となつてね。それを二つに分けたというだけの話なんです。

ヘブライ語で「ベレシート バラー、エロヒーム」と書いてあるけれど、この「エロヒーム」は神様のことなんです。この「神」、「エロヒーム」は、複数形なんです。おかしいと思いませんか？なんで、一番初めに出て来る神の名前が、複数形なんですか？「え？神は一人じゃないの？」って思うでしょ。でもね、堂々と、聖書の中で、「エロヒーム」と使うんです。で、これには、昔から、いろんな解釈があつて、位の高い人には、敢えて、複数形で使うんです。そういう習慣があるということで、納得されてきたんです。まあ、そうかもしれませんが、それだけじゃないんです。聖書全巻をこのようにゆっくり読んでいくと、分かってくるのは、神様は、単独で、おひとりなんだけれど、神様は《交わりの神様》、《共同体の神様》なんです。「三位一体」と、聖書のことばには書いてないけど、神様の性質をよくよく知っていくと、父と子と聖霊は、交わりの主であり、一体であり、一つであり、共同体的なんだということが、わかってくるんです。これ、奥義なんです。聖書には「三位一体」という言葉はないけれど、奥義のことばとして、受け止められていくんです。成熟していく子供たちには、神の子たちには、それが納得されていくんです。

「三位一体」が、奥義であるように、「アダム」と、神様が言う時に、男と女という共同体のことを言っていると分かってくるんです。我々は、ひとりの人（男の固有名詞）を「アダム」と呼んでいますけれど、「アダム」は、「人」という意味なんです。アダムとエバが居て、男がアダムと言うけれど、「アダム」という名前を誰も付けてないんですよ。ひとりの人（男の固有名詞）では、使わないんです。男から造られた女を見て、「はヴァー」と呼んだ。エバのことなんですけど。男が「エバ」と名前を付けているけれども、女のエバの方が男を見て、名前をつけてないんです。本当に、「アダム」（人）と、神様が言う時に、男と女という共同体なんです。《共同体的神様》なんです。だからね、イエス・キリストの共同体でしょ。神の家族でしょ。

「人の子」って、旧約でいわれた時に、「人の子」って誰よ。人間じゃない。でも、イエス様は人の子。旧約聖書から引用して、ご自身のことを「人の子」「人の子」と言われた。旧約聖書のダニエル書の中で「人の子」と言われている。その同じ章の中で「いと高き方の聖徒たち」の事である」と言うのが分かりますよ。ダニエル7:27「国と、主権と、天下の国々の権威とは、いと高き方の聖徒である民に与えられる。その御国は、永遠の国。全ての主権は彼らに仕え、服従する。」だから、「人の子」と言うのは、《キリストの共同体》のことを指して言うんです。これ、終末を考える時に、絶対、覚えておかないといけないことの一つ。ポイントです。

創世記2:1「こうして、天と地とそのすべての万象が完成された。」創世記2:2神は第七日に、なさっていた業の完成を告げられた。すなわち、神は第7日目に、なさっていたすべてのわざを休まれた。」と、書いてありますが、この「万象が完成した」と言っているのは、なんですか？「万象」って、日頃使わないですよ。日頃使わない言葉が出てきたら、「原語になんかあるな」と思わないといけないんです。訳す人がね、「苦心してるなー」っと、ピーンとくるんです。

「ツェヴァム」といって、「万軍」のことなんです。「軍隊」、「万軍の王よ」っていう「万軍」なんです。「天と地とそのすべての万軍が完成した」って、何かやるんですか？軍隊を造って、用意して、やる気満々じゃあないですか。「縁側でお団子用意して、涼みましょう」という雰囲気じゃないですよ。でも「神は、すべての万軍が完成し、第七日になさっていたすべての業を休まれた」と書いてある。人間もこの中に入っているんですよ。人間は、六日目に造られました。造られた次の日、何をしたんですか？「さあ、造られた！これから、治めるぞ！」って言って、胸張って、腕まくりして・・・、「違う、違う」「その次の日、休むんですよー。天の父は。」「嬉しい？」嬉しいですよ。すぐ急き立てられたんじゃないか。我々はね、救われて、本当に、神の子として、休まないと次、できません。なので、一番必要なのは、《神の国の安息》です。

安息の中に入りましたか？クリスチャンになって、主を信じて、安息の中に入りましたか？イエス様がおっしゃった「休ませてあげよう」ですが・・・、そもそも安息の加減を、心持ちを、覚えていますか？ちょっと忘れかけてきたら、そこに戻るんです。そのために律法では、「安息日」というのをつくったんです。「教えた」と書いてある。ところが、その安息になればなるほど、みんなカリカリと忙しくなって・・・、もう、そうじゃないんですよ。本当に。私達が必要なのは、まず、造られていく。《神の国に安息する》と、いうこと。これがとっても、大事なんです。

創世記2:3「神は第七日目を祝福し、この日を聖であるとされた。それは、その日に、神がなさっていたすべての創造のわざを休まれたからである。」2節に「休まれた」と書いてあるじゃない。2回書いてあるということは、なんか意味があると、思わないといけない。そこで、ここでミルト

スのヘブライ語聖書対訳シリーズのP23の三節目、順番にやっていると、「そして祝福した」「神は」「七日目を」「そして」「聖別した」「すべての彼の作業から」「創造した」「ところの（アシェル/関係代名詞）」「神が」「造るために」と書いてあります。三節の三段目、「バラー」「エロヒーム」「らアソート」って、書いてあるでしょ。バラーが創造した、エロヒーム、神が、らアソートは、造るためにです。その訳のことばが左上にあります。「この日に神はすべての創造の仕事を離れ、安息なさったので、第七の日を神は祝福し、聖別された。」と書いてあるこれは、新改訳でも何訳でも、ことば通りに訳せるんですけど、一番最後に《らアソート》と書いてあるこの不定詞は、余計なことばとして、有名なんです。だって、「造るために」がなくても、消しても訳文通り十分訳せますからね。「洞窟にこもって写本を書いている人が、この《らアソート》を付け加えたんじゃないのか」とか、そう思われているふしがいっぱいあったんです。でも「とにかく付けてあるから、一字一句落としちゃ駄目だから」と言って伝えられたのは、それをする人が、一生涯かけてそれやってくれたから伝えられたんです。2000年以上もこのまんまなんです。それで、今も消せないんです。なぜ消せなかったかという、伝えられてきたのは、今、我々には意味が分かんないけど、そのうちわかる時が来るだろうと、神様によってそう考えて、写し続けて来たんです。

そこで、この《らアソート》をよく見ると、「バラー」「エロヒーム」、「神が創造する」ということば、終わってから3つ目の「バラー」ですが、この「バラー」は、神にしか使えないことばなんです。人間には決して使えないんです。ところが、一番最後にある《らアソート》という不定詞なんですけど、この《らアソート》は「バラー」とは、違うんです。もし、「バラー」をことさら強調しなかったのだったら、同じ「バラー」の不定詞を持ってこないといけないんですが、わざわざ「バラー」（創る）に続けないで、最後に「アーサー」（造る）を持ってきている。神様にも、人にも使える動詞の不定詞の「アーサー」（造る）を使って《らアソート》（造るために）となっているのは、どういうことなんでしょうか。日本語の新改訳で読むとね、「それは、その日、神がなさっていたすべての創造の業を休まれたからである。造るために。」という意味になるんです。つまり、この最後の《らアソート》の意味は、「造るために、休まれた。」といっているんです。

原文の読みを大切にする古代からのラビさん達って、一つの解釈を一つだけ持っているんじゃないんです。あの読み方、この読み方、この言い方、この解釈、もう、何十通りもあるんです。原文では同じでもその解釈は、いろいろなんです。バラエティーなんです。その中でもいろいろ多くのだいたいの人が認めているのは、こうです。

「天地創造は、この時点では、まだ終わっていない」「まだ、これから造るんだ」「その神様の奥義を現わしている」と言っているんです。「いやー、私、終わったと思っていたから、終わったんです。」って、言うのもいいです。色々あっていいです。けど、原文で確かにそう読めるというところ、それがここだけでなくて、旧約の全巻、新約の全巻、イエス様の恵みからも、全部通してからもみて、どっちの解釈がふさわしいのかっていうところを考えないといけない。

ユダヤ教のラビ達は、新約聖書を知らなくても、旧約のそのページの中だけで、神の創造は終わっていないと判断した。じゃあ、新約の異邦人の我々皆さんは、どっち取りますか？それを、皆さんの前で問かけている。それが、招待されているということ。創造の時は、だあーれもないよ。みなさんの周りに。本当にアダムしかいなかったんだから。そのアダムがもし、あなただとして、

「神と万軍の中に、アダムであるあなたが、そこにいる」として、そこに招かれた者として在る時に、それがあなたの礼拝です。本当の礼拝です。

我々は、礼拝というのを、すぐ、自分の家庭環境や仕事の環境や、もう、あれもこれも、嫌なこと、試練なこと、全部がまい込んで、背負い込んで、「ああ、神様、礼拝します。」って、思うじゃないですか。そうじゃなくて、本当の礼拝は、神の創造の中に、自分と神とが向かい合って、その中にポッシンという時、『私に何を語られているか』ということ、問わなければいけない。そういう礼拝者たちが集まって、《神の国》が出来るんです。《神の国の共同体》が出来てくるんです。《キリストの体》が出来てくるんです。・・・ですね。

先程、メロディーをつけて歌ってしましたが、この3節もメロディーをつけて歌うと、こんなふうになります。聞いていてくださいよ。「ヴァイエカデシュ オトー キー ヴァ シャヴァト ミコル メラフトオー アシュル バラー エロヒーム らアソート」(朗読) 最後再度「アシュル バラー エロヒーム らアソート」こういう風に。「らアソート」は余韻をもっていないませんか?! 七日間の一番最後の一言ですよ。

じゃあ、七日間で主が、私達に何を現わしたかったのか。 「ただ、造られたその場所で、くちやくちやつと耕して、用意して、守ってね」って、それだけ?! 昔ね、ある人から「神様は、人間なんか、箱庭のペットのような存在なんですね。」と質問をされたことがありました。「いえ、いえ・・・」「でもそうなんじゃないですか? そんな中で、仲良くちゃんと正しいことをしていれば、それで、OK なんでしょ。」っと。

エデンの園、神の国、って何ですか? 神様は、そこからスタートしている。
何を始めたかったのか。どんな《神の国》を造りたかったのか、ハイ、そこで、2章4、5、6節と、エデンの園の描写が続いていきます。

後半

創世記2:4「これは天と地が創造された時の経緯である。神である主が天と地を造られたとき、創世記2:5 地には、まだ一本の灌木もなく、まだ一本の野の草も芽を出していなかった。それは神である主が地上に雨を降らせ、土地を耕す人もいなかったあらである。」創世記2:6「ただ、水が地から湧き出て、土地の全面を潤していた。」

これは、天と地が創造された時の記述です。神である主が、天と地を創造された時、つまり、1章のエデンの園自体の造られるところを、ズームアップしているわけです。同じところが2回話されていて、内容が違ふんじゃないの? って、良く思われるんだけど、そうじゃなくって、1章の人が造られたところをもう一回、そこをずーっと近づいて行って、ズームアップしているということが言えます。神様がなさった動作、言った言葉、そして、使われている動詞、繰り返されていることばに、ゆっくり注意する必要があります。

創世記2:7「神である主は土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで人は生きものとなった。」 1章の神は、「エロヒーム」「神は天と地を造られた」でしょ。2章からはちょっと違う。「神である主」と言われている、この違いはなに? それだけじゃなく、「神である主」が繰り返されるようになった。つまり、「主」というのは、「自分が最も大事にしている主人」

「自分の頼りにしている方」「向き合っている方」ここから究極的に自分の大事なお方として、このお方を主とするんです。つまり、「主」って言うのは、1章から言っているように、既成概念。ひとりぼっちで誰もいないのなら、「主」なんて言われる由縁はないんです。ですよ。ね。
「主」と言われる限りは、その人を頼り、その人と一つになり、互いに向き合える人が他がいるから、「主」なんですよ。だから、単なる「エロヒーム」として、共同体の性質を持つ、「神ご自身」という言い方ができたけど、今度は、人が造られて、人にズームアップしていったわけです。その時に「神である主」という言い方にチェンジしています。ここに交わりの神の性質が現れている。

創世記2:7「神である主は、ちりで人を形造り、その鼻にいのちの息（これを息と霊、魂、いろんな意味で訳されています。）を吹き込まれた。そこで人は生きたものとなった。」という、この書き方の紹介の仕方は、動物たちを造った時と全然違います。人は特別です。

創世記2:8「神である主は東の方エデンに園を設け、そこに主の形造った人を置かれた。」この「置かれた」という表現が、何か箱庭に人型を造って、そこにボンと置いて、それを真ん中に置き直したっていう、そんな印象を受けるんじゃないですか。あまり好きじゃない言い方です。ここで言う「置かれた」「置く」の広い意味は、例えば「彼を部長の席に置かれた」とか、「彼を係長に置いた」という表現。これね、すなわち「任命する」そこに「設定する」そこに大事なものとして「あてがう」そういうことばである「置いた」が使われています。語意は間違っていないと思いますが、もっと重要な置き方、すなわち「認命されている」という意味があるんです。

創世記2:9「神である主は、その土地から、見るからに好ましく、食べるのに良いすべての木を生えさせた。園の中央には、いのちの木、それから善悪の知識の木を生えさせた。」いやー、いよいよ出てきましたね。問題の木が・・・。「いのちの木を園に造った」「善悪の知識の木を生えさせてた」というんだけど、それを「園の中央に生えさせた」と書いてある。後に「善悪の実は、食べてはならない」と、言うんですよ。「食べたらいけない木をわざわざ中央に植えるか？食べたら駄目なんだったら、隅っこに置いとけよ。」と、つつこみたい人は言うんだろうけどね。(笑)でも、わざわざ中央にいのちの木を・・・ね。

それから、この語りかけを聞いた当時の人たちは、誰よ。「我々じゃない。」この語りかけを現地で聞いた人は、・・・つまり、モーセ五書。創世記、出エジプト、レビ記、民数記、申命記まで、律法のズラーとある、613 とも言われている律法を全部聞かされている人達でしょうね。それも何処で？荒野ですよ。その荒野で、ズラーと、天幕が張ってある。その移動した群れの中央って、何があるんですか？「幕屋」です。幕屋は何ですか？「神の臨在のある所」ですよ。エデンの園のわざわざ中央に「いのちの木を造った」ね、どんな味だろう。で、それとっしょに善悪の木を造ったんです。このことの意味は？幕屋に入れるのは誰？そこには、聖所所と至聖所がある。そこに入って行けるのは、誰よ。どんな人よ。誰でもいいの？その辺のアンちゃんが、その辺の主婦が幕屋に入って行けるの？行けませんよ。ちゃんと調査して、身を聖めて、そういう祭司が入れる。そういうところですよ。「神の臨在があるところ」ですよ。

「中央に」と聞いたら、「中央に？」「中央か！」「聖所所と至聖所がある中央か！」ということに

東京キングダムセミナー①2022.10/1

なるんです。それから、その中央に「いのちの木」と「善悪の知識を知る木」があるけれど、食べていけないのは、「善悪の知識を知る木」。これ、また後で、てきますからちょっと置いて、いいですか。それを「食べて良い」「食べてはならない」という前に、話が、コロッと変わるんです

創世記 2:10「一つの川が、この園を潤すため、エデンから出ており、そこから分かれて、四つの源となっていた。」創世記 2:11「第一のものの名はピジョン。それはハビラの全土を巡って流れる。そこには金があった。」創世記 2:12「その地の金は、良質で、また、そこにはベドラハとしまめのうもあった。」創世記 2:13「第二の川の名はギホン。それはクシュの全土を巡って流れる。」創世記 2:14「第三の川の名はティグリス。それはアチュルの東を流れる。第四の川、それは、ユーフラテスである。」

これって、作者が変わります？！「エデンの園の描写をしながら、何よ、その気になるじゃない。その善悪の知識の木の事、続けてよ。」って、思うじゃない。「でも、なんでこの川の話するの？」って、突っ込みたくありません？でもね、これ、良く読んでみると、その四つの源となっていた一つ川が、「その園を潤すため、エデンから出ており、そこから、分けられて、四つの源となっていた。」と、語っているんです。これ、この読み手が聞き手に、聞く人がたちが、頭の中に思い浮かべる全土なんです。ワールドワイドなんです。「当時の園というのは囲まれた箱庭じゃないよ。そんな箱庭の中と勘違いするな。そのエデンの園から全世界に経済、産業のもと、いっさいの良きものの元として川となって流れ出て、潤し満たされたものなんだよ。」と語っているんです。その中央に、「いのちの木があるんだよ。善悪の知識を知る木もあるんだよ。」と語っている。こういう壮大なエデンの園の描写なんです。その中でこれを聞く人はどこにいるんだろう。エデンの園の中に自分はどこにいると思う？ 神とともに、他、だれもいない。「神と向き合っ
て、自分はさあ、これから、祝福されて、安息していきますよ。」と、言うことになる。

創世記 2:15「神である主は人を取り、エデンの園に置き、そこを耕させ、またそこを守らせた。」また「置き」が出て来た。「そこを耕させ、またそこを守らせた。」って、何回もね。何のために人がいるかってことを繰り返して教えている。「そこを守らせた」って、何から守るの？守るという以上は、なんか攻めて来るものがあるの？争うべきものがあるんでしょね。害鳥？害獣？害虫？そんなものがある。「守らせた」と語っているここは、とっても大事なんです。

創世記 2:16「神である主は人に命じて仰せられた。「あなたは園のどの木からでも思いのまま食べてよい。」←さあ、きたー！創世記 2:17「しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるとき、あなたは必ず死ぬ。」←ハッキリ言われちゃっています。

善悪の知識の木ですよ。善悪の実じゃない。「善悪を知る」というところに大切なポイントがある。「善と悪とを分ける」という、「善と悪を区別する力」「善と悪とを見分ける力」「権力」それって誰のもの？ 究極的にはそれは、「神の共同体」の誰もが勝手にもっているわけ？

「善と悪」というのは、これまで神様が一章の初めから、「トープ（ヘブライ語で善い）」「良かった」と言ってきたものです。でも、その中で、「悪い」とは言っていないけれど、神のすべての心を通じて、「良いと任命」して、「祝福した」その二つの関係性の中で発したその重い言葉、その「善い」と一方、「悪い」ですよ。祝福と呪いですよ。祝福と呪いを決められるのは、誰なのよ。それは、

「造り主であるエロヒーム」だけでしょ。「エロヒームだ」けでしょ。「エロヒーム」以外に究極的にそれを決定出来る方はいませんよ。それを植えていた。それを取って食べることは、自分が神になることになる。「自分が神の権威、神の能力を用いるんだ」と、神を除外して、神をなしにして、神様を削除して「自分は、それが出来るんだ」という、生きる道を指し示していることになるんです。皆さんもかつてはそうだったでしょ。

主に出会う前に私が決めて、「神様なんて、知らぬ存ぜぬ」「知らないのよ、私が決める。私が生きる」と。でもその道がどんなに的外れだったか。と、いうことに気が付いて、私達は主の前に膝まづき、「神様を主」とした。「善悪の知識の木の実」を食べるということは・・・、それほど、決定的な差があります。

皆さんここで深読みがあるんです。「そこまでいうか?!」というほどの深読みがあるんです。昔、セミナーのところで、ちょこっと、言ったことがあるんだけど・・・、みなさん、私がここで言うからって、明日、自分の仲間のところでね、「ここね、間違っているのよ、聖書はこうなのよ。」と、言わない方がよいですよ。自分でそうだと納得してから言ってくださいね。いいですね。そうでないと、上っ面だけが広がっていくから。で、誤解されるのよ。で、何かというと、いいですか、

神様は「園のどの木から食べてもいい」と言っているんです。ということは、中央にある木も食べていいんじゃないですか。どの木からも食べていいんだから。これを厳密に、一語一語読む人は、そうとも言うんです。これは、昔から、ユダヤの人の偉いラビさん達が代々、代々、それも言ってきたことなんです。それも心にあり、こっちも心にあり、こうやって神に礼拝しているんですよ。そして、その中に新しい解釈と啓示を聖霊から得ているんです。そういうもんなんです。「牧師先生、絶対正しいことを言ってください。」「牧師が言ったから、私、それを信じます。」というのは、違うんですよ。自分の責任で見極めないといけません。

「全部食べていい」と言っているんだから、真ん中の木も食べていいんです。でも、後で、「善悪の木の実は食べるな。」って、これはどういうことよ。それは、「全てある木の実」を、食べてもいいけど、いのちの木の実も『木の実として』すべての実を『いのちの木の実』として食べて良い。食べるか？」それとも「神様が備えて下さった全部の木の実を『善悪の知識の木の実』として、食べるか？」「どっちにする？」と、問われている。

「いのちの木の実」として、それを食べるか、それは、『実』そのものの問題じゃない。食べる側の、こちら側の問題であると。

「善悪を知る実」、すなわち、「神を凌いで自分が決定してやるんだ」「自分がそれを決められるんだ」、「神を除外して、出来るんだ」という気持ちで、園のすべての木の実をあなたは食べるのか。朝ごはん、昼ごはん、おやつに、夜食に・・・、食べるんですか？食べるんならそれでもいいよ、自由だよ。でも、そうして食べるうちに、食べられていくうちに、「あなたは、必ず死ぬ。」と。

そうじゃなくて、「いのちの木の実」が中央にあって、「いのちの木の実」として・・・、ということよ。善悪の基準でものを生きている人、全て神を排除して、神に聞くことなく、聖霊に尋ねることなく、みことばに照らすことなく、「ね、いいだろう？俺がやりたいんだから。」「わたしがしたいんだから」「私が思いついたんだから、これ、したいのよ」ね。「神様、ついて来い！」「神様、私

を祝福してくれるでしょう。」って、やるんですか？

それは、「一章の初めから、神様が、聞き手に向い合って、語り合ってきた、そして、それに応答してきた、その人の在り方か？」って・・・ね。

そうすると、エデンの園というのは、遠い過去の昔の、何千年、何万年まえか、知らないけれど、そんな遠い昔に、あった昔話じゃあないんだよってことです。今、生きている私たちの今日というこの日も、エデンの園なんです。あなたは「キリストによって、神の国に入った！」とね。そしたら、『そこには善悪の知識の木の実は、いのちの木の実はない』というのか？・・・と、いうことですよ。

聖徒から質問「聖書のみことばで、人をさばいてしまうことがあるんですけど・・・。」そう、あるよね。私達は、ついつい、そうしたい。そう発想したい。ね、「自分と違ったことを言う。自分と意見が合わない。歩調が合わない。」っていう。はい、そりゃそうですよ。ありますよ。新約聖書のところで詳しく書いてあるんだけどね。あります。でもね、その人の中にも御霊が働いていて、もしそうならば、待つべきでしょ。本当に御霊によってどう判別されるか、みことばが何と言っているか。《私達は謙虚にいのちに繋がっている生き方なのか》と、言うことです。いのちに繋がるということは、本当に、《主と、向き合うことを始めた人》でないとわかりません。できません。

皆さんね、いきなりここ読んでね、こうなのよって言ったら、大概、わからなくなります。今の順番で、私が説明したから、「そうなんだ」と思うけれどね、これは、2次的解釈というんです。1次的な解釈は、本当に実があって、これを食べるか食べないかの問題、そう、言ってるんです。だから第1次的なものを第一にすべきです。だから、いの一番にそれを言ったら、もう、わけがわからなくなります。

聖書を読んだ時に、私たちの住んでいるのは、3次元の世界でしょ。見えている世界。神の世界は、4次元、5次元、6次元、でしょ。分かんないじゃないですか。私達の頭には、神の国の真理が全部、入らないんです。見えないんです。だから（ホワイトボードに絵を描かれながら）、こちらは、無限の世界ですよ。人間の世界は有限の世界でしか伝わらないよね。そしたらこの二つの世界、神様が何かを啓示させる時に、この有限の私の頭にどうやって分らせることができるのか、霊的な世界を・・・。それは、そのまま、ここに一つの絵を描くんです。これね、まあ、いわゆるシンボルです。ここにあるこの絵、一つのエデンの園の情景の絵です。いいですか、このエデンの情景を描いて、人間が、これを見た時、「あー、このエデンの園の中央に、いのちの木と善悪を知る木の実が生えていた」という情景を描かせて、「それを取って食べると、死ぬよ」と言う。「死ぬよ」って言われたって、こういう成り立ちと、情景を描いてもらわなければ、わからないじゃないですか。この世界のことをわからないじゃないですか。だから、この人がこれを読んだ時、見た時、「私は、こう思うぞー」と。で、こっちの人が、これを見た時、「ああ、私はこういうふうに思うぞ」って、みんな違うんです。違っていいんです。いいけど、描かれたものは、一つですから、聖霊が、これを通してこの人たちに働いて、これを正しく解釈できるようになっていく。だんだんと。ぼやーっと、見えてきたけれど・・・まだ夕暮れ、朝、朝が明けるまで、ぼやーっと、しているけれど、日が昇って光が差していくと、景色がはっきり見えてくるで

東京キングダムセミナー①2022.10/1

しょう。そのように、神の時が、神の時代がやってくれば、これがだんだんと、はっきり見えて来る。これが、聖書なんです。

だけど、預言書こう書いてあるから、この世でも「これだぞ」と、言いたいんです。人は・・・、「エゼキエルでこういってるぞ。戦争だってよ」という絵が、預言者によって描かれた。この絵を見た人は、この絵の通りに、「これが、これだ」って、「これがこっちだぞ」「これがこの国だぞ」って、言いたいんです。みんな言いたい。でも、それは、その時に見えているだけで、本当に神の光が聖霊によって、サンサンと降り注がれるようになったら、「ああ、エゼキエルのあれは、
「あア、こうだったのか、イエス様のマタイの24章って、「あー、こうだったんだ」って、分かるようになってくる。それも、「善悪の木の実」を取って、シャカリキ取って、「俺が一番初めてとって食べたい」と思う人もいるでしょう。そうしたら、この絵をもう、いかようにも解釈していきます。

皆さん、コレ、2000年、2020年、202?年のこの時代のこの時代だけではないですよ。歴史的に教会史を見て下さい。もう、紀元1世紀からずっと、ずーっと、どの世紀も、どの世紀もです。もうすぐ来る、もうすぐ夜は明ける、夜は明けたーと、何世紀も言ってきたんだから。一番ひどいのは、紀元1世紀ね、そして、10世紀の時、20世紀の時、「キリストが、今にも来るぞー！」とシャカリキになっていながら来なかったんだから。ね、それは、不思議です。ものすごい真理です。終末論を言い出すと、ちょっと、ショックな方もいるかも知れませんが、どうぞ、そこはね、御霊とともに、ゆっくり、しっかり、考えましょう。

創世記から黙示録までのすべての啓示をもとに御霊によって、「いのちの木の実」を食べながら、私達は、考えたいと思います。

創世記2:18「神である主は仰せられた。「人がひとりであるのは良くない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう。」

人がひとりであるのは良くない。—これは、共同体の神様です。交わりの神様です。ね。この生き方をするのにアダム一人は良くないと言われた。ハレルヤ！二人は一人よりもまさっていると言って、ね、(ひとりだけでなくてよかった。)で、「彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう」と言われて、妻が出来たんだと、聞かされてきましたよね。

「助け手」ってなんでしたか？ハイ、「エゼル ケネクドー」(*二章18節ミルトスのP27プリント配られる。)太いカッコで囲ってある、18節の一番初めから、「そして言った」「主なる神は言った」「善くない」「人が」「彼ひとりで いることは」「私は、彼女を造ろう」(ここを女性形にしているところ？です。こうじゃない写本もいっぱいあるから、このミルトス社のそれは、こっちをとっているけれども、両方あるということを分かっておいてください。)
「彼のために」「私は造ろう」何を？「エゼル」助け手 「ケネクドー」このネクドウの意味は、下に書いてあります。「ふさわしい」とは、書いてないんです。「彼と『向き合うもの』としての助け手を造ろう」と書いてある。これが、もともとのことばの大切な意味です。

「彼と向き合うものとしての助け手を造ろう。」ですが、この「ふさわしい助け手」って、「なんのこっちゃ、どうふさわしいのか」と、この原典の聖書を使う文化の元では、思うんです。ところが、日本では、結婚式で花嫁に「ふさわしい助け手」と言うんです。これは、ロマンチックじ

東京キングダムセミナー①2022.10/1

ありませんか。どうですか？皆さんの乙女の頃を思い出して、ね、「さあ、私はあなたのふさわしい助けでよって。」男の人が喜ぶような、ね、ものすごくロマンあふれる訳です。「ふさわしい」のですから。ヨーロッパや欧米では、そういう意味合いで言われて、この言葉が結婚式でいっぱい使われるんです。歌われるし・・・、

でもね、「ケネクドー」は、彼と「向き合うもの」として、これが丁度いい言葉です。でも欄外を見て下さい。下の欄外を、18節の欄外、「エゼル ケネクドー」まあ、これ、カタカナふってないけど、

《彼と》向き合うもの“としての助け手》が直訳、この下に「真向いの 反対の」って、書いてあるでしょ。それを見てごらん下さい。あのね、「助け手」「ふさわしい助け手」っていうのは、片方の人間が、片方の人が、何でもお手伝いしてね、「ハイハイ、あなた、取ってきましたよ。」「ご飯できましたよ。」早く、あれを、これを、「明日出張だね。」って、「全部助けてね」と、そういうイメージじゃないですか。でもね、聖書は違いますよ。真向いの、反対の、正反対の、これね、真反対になる。反対意見を突き合わせるという。そういう時にも、使われるのです。

もし、これが夫婦だったら、夫婦と言うのは、どっちがどっちかの為に奉仕して仕えるんだっていうイメージを持ちやすいけど、聖書の原典的に言うなら、妻は何も、夫の顔をうかがって、夫の先回りをして奉仕してやるのが、『エゼル ケネクドー』か？「違うぞー！うん？」と思う。もう、正面切って、「あなた、それ、間違っているよ、違うでしょ。それって、その考え方、おかしいんじゃないの？」「ね、神様。そんなこと、そもそも言ったの？言っていないの？どうなのよ」「私はそんなこと思わない。嫌だって。これって、大省令（執行命令）なのです。すごいでしょ。私がこう言ったからって。たちまち家に帰ってそれやったら、エライことになりますよ。（笑）内にしっかりとどめて、消化してからやるなら、やってください。『エゼル ケネクドー』が、そうだと分かっている夫だったら、ね、おおいにやったらいいのです。

だから、『エゼル ケネクドー』っていうのは、ふさわしい助け手というイメージをどけないといけません。本当に向き合うんだったら、「あなた、そこ違うんじゃないの？」って。何で言えないのですか。「ケネクドー」してから、言い合うのが「向き合い」でしょ。そこを言っているのです。だから、いいですか、共同体の神は、神様も私たちの間でも、一私たちは、自分の思いだけを、神様に表現できるわけです。—していいんです。エデンの中で、我々は、御国の中で、「主よ、私は、ああです。こうです。・・・。」それをもう包み隠さず、言う前から、主は知っておられるけれど、言う自分の『私たちの心の向かい合い』が、尊いわけです。それをね、こんなこと言ったら神様は起こるんじゃないかしらって、そう思ったら、もう神の国じゃない。

私たち、兄弟姉妹、キリストの共同体、一つ御霊を持っている。一つ御霊を飲んだものというものは、そこを分かち合うことができるものです。屈託なく、神の国はそうようにして、小さなからし種のようなものです。「それが育って、芽が出てくることで、野菜のようになり、木のようになり、枝が生えて伸びて、巣が作られる様なくらいにまでなりますよ。」という過程の事なのです。プロセスなのです。私たちが、今、それやこれが、全部できなくていいのです。
そのからし種の一粒の種を大事にね、一步、一步、兄弟姉妹たちの間で、家族の中で、職場の中で、近所の中で、育てていくことが、神様が祝福なさる御国の共同体に繋がるのです。アーメン！